

文字の体系と文字解読の原理

大竹昌巳

1.

忘れ去られた文字や言語の解読をめぐる物語については、数々の著作で語られている¹。「解読」という名の下にそれらが扱っているのは、文字体系の解明、文書の読解、基底の言語の復元などさまざまである。

しかしここでは狭義の文字の解読、すなわち文字体系の解読に話を限定する。もっとも文字体系の解読は同時に基底の言語の解読とも密接に関係しており、単純に分離できるものではないが、ここではできるかぎり言語の問題を排除して文字体系に焦点を当てたい。

まず、そもそも「文字の解読」とは何をすることかを問うておく必要がある。

Forgotten Scripts の著者でセム語学者のゴードン Cyrus Gordon は、狭義の「解読 decipherment」について次のように定義している：

Strictly speaking, the term applies to obtaining from scratch the pronunciation of the symbols in texts that cannot even be pronounced before the decipherment. (Gordon 1982: 14)

(津村訳は「厳密にいえば、この用語は、解読以前には発音すらできなかった文書の文字記号の音価を、まったく最初から決定することを意味する。」(30-31頁))²

しかしこのような定義は、話を表音的な文字の解読に限ったとしても、はなはだ不十分である。例えば、線文字 B は表意文字 ideogram と呼ばれる記号群を別にすれば、純粋な表音文字(音節文字)体系である。しかし、音価が決定されたところで、𐎧𐎺 *po-ro* という文字列が/pōlos/「仔馬」という語を表していると言えるためには、それ以上の知識が必要であろう。語の音声形式は、音価の単なる足し算で出てくるとは限らないからである。音価を推定することが文字の解読であるとする考えは、一面的にしか解読の現実を捉えていないのである。もちろん、音価の推定数だけによって解読の進展度合を示すことも妥当ではない。

¹ 手許にあるものをいくつか選んで挙げるだけでも、Friedrich (1954), Doblhofer (1957), Chadwick (1958¹ 1967²), Cleator (1959), 高津・関根 (1964), 西田 (1967), 杉 (1968), Gordon (1968¹ 1982²), Cottrell (1971), Pope (1975¹ 1999²), 矢島 (1980), 西田 (1982), Coe (1992¹ 1999² 2012³), Robinson (2002¹ 2009²) などがあり、20世紀後半以降、これらの物語が絶えず人々を魅了してきたことが窺える。

² “The pronunciation of the symbols”がやや曖昧だが、後段ではこれと同義で“the phonetic values of the signs”を使っているから、邦訳の「文字記号の音価」のように理解してよいと思われる。

2.

文字の解読が何をすることかを理解するためには、まず文字体系がいかなるものかを理解する必要がある。以下では、私なりに理解する文字体系の概要を述べてみようと思う。

文字体系 writing system とは、それ自身記号体系であるところの言語を表すための、有限個の視覚記号とその組み合わせ方の規則からなる集合である。ここで言う視覚記号は**字素 grapheme** と呼ばれるが、字素は文字と言語の関係を断ち切らずに体系的に分解可能な最小の単位である。字素は、(抽象的な) **字形 form** と **字価 value** との結合体であると考えられる。例えば、現代仮名遣いにおいて字素<か>³は、「か」という字形と/ka/という音価 phonological value とが結合したものであり、字素<を>は、「を」という字形と(助詞の){o}という形態音価 morphophonological value または形態価 morphological value とが結合したものであるといえる。前者は表音的 phonographic 字素、後者は表語的 logographic 字素と呼ばれる⁴。この他にも、字素には例えば限定符(決定詞) determinative として使用されるものがあるが、これは字形と範疇価 categorical value との結合体といえる。

1個ないし複数個の字素を字形上1つに組み合わせた1まとまりの単位を**字 graph** と呼ぶ。例えば、かなにおける「か」や「が」、ハングルにおける「말」や「값」、チベット文字における「འགྲུ་» や «མི» など。かなはモーラを単位としているのでモーラ字 moraic graph、後二者は原則として音節を単位としているので音節字 syllabic graph という類型をなす⁵。他にも例えば、モンゴル文字(縦文字)や契丹小字では原則として1字が1語にあたるから、表語字 logographic graph といえる。また、理想的なアルファベットでは1字素がそのまま1字でもある。

字よりも上位の単位に**語 word** がある。ここでいう語は、必ずしも文法的語 G-word や音韻語 P-word とは一致しない。語分割記号 word divider (スペースを含む)による分かち書きを行う文字体系においては、これが正書法上の語 Orthographic word (O-word)として明示される。

文字体系は、字素目録と外面組織、内面組織の大きく3つからなる。

字素目録 graphemic inventory は字素の一覧表であり、字形と字価との結合に関する知識が含まれている。

外面組織 external systems には、字形の実現形式に関する規定、字素の排列法(字の構成法)、字の排列法(書字方向)、句読法など、文字の視覚的実現に関する諸規則が含まれる。

³ 以下、字素は<>で括って示すが、特に問題とならない場合には<>を省略することもある。

⁴ 両者はしばしばマルティネの二重分節 la double articulation 理論 (Martinet (1960) 第一章等) と関連づけて説明される。すなわち、前者は第二次分節の単位である音素 phonème (群)を表記する字素、後者は第一次分節の単位である記号素 monème (群)を表記する字素といえる。

⁵ 現代のハングルは形態音素論的な正書法を採用しているため、音節の切れ目と字の境界とが一致しないこともあるが、音節を単位にする(すなわち各字に音節核は一つ)という原則は当初から崩れていない。

字素の実現形式は、字内の位置によって大きく形を変える文字体系（西田（1986）のいう「環境制限型」の文字）において特に問題になる。字の構成法は、字素をどの順でどのように配置して字を組み立てるかに関する規則である⁶。例えば、先に挙げたチベット文字の「བཀྱའ་དྲུག་»は *brgyad* と転写される字だが、図形表現上は $\begin{matrix} r & & ② \\ b & g & d \\ & y & \\ & & ④ \end{matrix}$ のように配置されている。書字方向は、縦書きか、横書きか、縦書きとすれば行は左右どちらに進むか、横書きとすれば右横書き（右→左）か、左横書き（左→右）か、あるいは各行ごとにそれを交互に繰り返すか（牛耕式 *boustrophedon*）が問題となる。文字体系によっては、そのいずれかしか採らない（採れない）ものもあれば、複数の書字方向が可能なものもある⁷。

内面組織 internal systems には、字価を綴り合わせてどのように基底言語の語を表記するかに関する規定、すなわち「綴字法 *spelling rule*」が含まれる⁸。

上に挙げた諸概念は個々の文字体系に適用する場合（特にそれが「歴史をひきずった」正書法をもつ文字体系の場合）には問題が生じる部分がないわけではないので今後修正が必要なところもあるが、以下ではこれらの用語を使用する。

3.

文字体系がどのようなものであるかを見たところで初めの問いに戻ると、文字の解読とは、簡単に言ってしまえば、文字体系全体を説明することにほかならない。字素の字価を決定するのは、その手続きのごく一部にすぎない。

ところで、文字の解読＝文字体系全体の解明の過程には、いくつかの段階がある。まず大前提として、我々解読者が目にすることができるのは、文字体系そのものではなく、その視覚的実現形式であるところの具象的・個別的な文字列（テキスト）にすぎないことは銘記しておくべきである。最初の段階においては、我々は対象として扱う文字体系に関して何らの知識ももたない（まったくの未解読の状態）。

初めの諸段階は、この文字体系の外面組織を明らかにし、どれだけの字素が弁別されるかを決定することである。テキスト内部から得られる情報を**内部情報 internal information**、それ以外の、同系言語や歴史文献の記述などから得られる情報を**外部情報 external information** と呼ぶ（対訳テキストもこちらに含まれる）と、外面組織の多くは内部情報のみの分析からでも帰納することが可能である。もちろん、類似する文字体系が知られていれば、その情報（外部情報）は理解の一助となることもある。

内部分析においては、「分布 *distribution*」の概念が特に重要である。すなわち、どの要素がどの環境でどのように出現し、どの要素と交替・共起するか／しないかを体系的に見極

⁶ 西田（1984, 1986）はこれを「形字法」と呼んでいる。

⁷ 西田（1984, 1986）はこのような字の排列に関する決まりを「統字法」と呼んだ。

⁸ 河野（1977）やそれと主旨を同じくする『言語学大辞典』「文字」の項が強調するように、「文字の根本的機能」は表語 *logography* にあると考えられる。ここでは表音的字素だけでなく、語を表記するために使用されるすべての字素の運用法として綴字法を考える。

める必要がある。このような体系的な視点が十分でないと、字素の「分けすぎ問題」等が発生する虞もある⁹。

外面組織の「解読」は、内面組織を理解するための基礎を与える、文字解読の重要なプロセスである。しかし、本稿で扱いたいのは、むしろこの後のプロセス、つまり、内面組織の「解読」——各字素がどのような字価を有し、それらを用いてどのように語を表記するか、を決定するプロセス——である¹⁰。

4.

内面組織の解読は、内部情報と外部情報とに整合的な字価や綴字法を設定していく作業である。これは大変に困難を伴う仕事である。というのも、ほとんどの解読では、出力形である字形列のみが与えられていて、それ以外の、入力形である語や、入力形から出力形を導くための規則（綴字法）、出力形に用いる字素の字価のすべてが未知の状態から始めなければならないからである。この困難な状況を簡単な数式に喩えてみるとこんな感じだろうか（あくまでも喩えとして）。

$$\begin{cases} xy + p = \xi \\ yz + q = \eta \\ zx + r = \zeta \end{cases}$$

未知数 x, y, z は字素の字価、 p, q, r は綴字法上の規則、 ξ, η, ζ は語であり、方程式の総体がテキストである。つまり、方程式は与えられているが、各方程式の項はすべて未知数なので、このような連立方程式をみたす解は無数に存在するという状況なのである。

そこで解読者は、そのうちのどれかを決定しようと試みる。多くの場合はまず、外部情報を利用して入力形である語を仮定するところから始めるのである。例えばグローテフェント Georg Friedrich Grotefend が王の称号の中にヒュスタスペス、ダリウス、クセルクセスといった人名を仮定し（Grotefend (1802)）、ヤング Thomas Young やシャンポリオン Jean-François Champollion がカルトウーシュの中にプトレマイオスやベレニケ、クレオパトラやアレクサンドロスといった人名を仮定したように（Young (1819), Champollion (1822)）¹¹。

⁹ ここで「分けすぎ問題」と名付けたものは、字を分解しすぎてしまい、単なる筆画にまで意味を見出してしまうもので、解読史の初期に生じやすい。例えば、マヤ文字解読におけるウォーフ Benjamin Lee Whorf のアプローチ（Coe (2012: 137) [邦訳 195-196 頁]）や、契丹小字解読における愛宕 (1956) のアプローチ等。

¹⁰ 本稿で詳しく扱わない部分も含め、文字解読の方法論について詳細に取り上げた、私の知る限り唯一の著書として Barber (1974) がある。なお、本書も内部分析により外面組織を解読したのちに外部資料により内面組織を解読するというようなプロセスを考えているが、実際には内面組織との兼ね合いで外面組織を修正する必要が生じる場合もあり、両者の解読過程が明確に前後に分かれるわけではない。

¹¹ 場合によっては、それ以前にすでに字価や綴字法に対してある程度の知識が得られていることもある。例えば、ヴェントリス Michael Ventris がアムニソスやクノッソスといった地名を音

言うまでもなく、これらはいくまでも語の概略であって、その基底言語の音声形式そのものではない。その正確な形式はふつう、内面組織の解読と同時進行で得られるものである。実際にはまずありえないが、ここでは正確な入力形が独立に決定できるものと仮定して話を進めよう。

5.

入力形である語が決定できたとしても、そこから演繹的に字価と綴字規則が決定されるわけではない。先ほどの喩えで、未知数 ξ, η, ζ の値を決定しても、 $\{x, y, z, p, q, r\}$ の組は無数に存在することがそれを示している。

では、どのようにして解読は達成されうるのだろうか——これが本稿の主題である。

演繹的に決定できないとすれば、解読者は非演繹的な推論を行っているにちがいない。そのようにしてみると、ほとんどの解読者が（その解読が成功に終わったか否かは別として）少なくとも以下のようなヒューリスティックな仮定を、無意識的にはあろうとも、あるいは徹底してはいなくとも、置いていることに気づく。

- (1) **単価性の仮説 monovalence hypothesis**：各字素の字価の数は、1つでなければならない、という仮定。
- (2) **異価性の仮説 heterovalence hypothesis**：各字素の字価は、互いに異なっていなければならない、という仮定。
- (3) **照応仮説 correspondence hypothesis**：綴字の各部分とその指示対象である語の各部分は、一致しなければならない、という仮定。

例えば解読の際、字素<A>, , <C>からなる綴字 ABC において、字素<A>の字価を a と推定したので、また別の綴字 ADE や FAG においても字素 A の字価は a にちがいないと考えたとすれば、(1)を前提していることになる。また、ある字素の字価を a と推定したので、別の字素の字価は a ではないはずだと考えたとすれば、(2)を前提している。さらに、字素<A>, , <C>の字価をそれぞれ a, b, c だと推定したので、綴字 ABC によって表される語は (bc や $abcd, abd, acb$ ではなく) abc にちがいないと考えたとすると、(3)を前提していることになる。

(3)についてはさらにいくつかの仮説に分けることができる。一つは**等量性の仮説 quantitative equivalence hypothesis**であり、これは例えば、字形「か」が語の音声形式/ka/

声形式として仮定できたのは、すでに音価や綴字法に関していくつかの推定がなされていたからであった（「ワークノート」Note 20 = Ventris (1952)）し、マヤ文字の解読においては、いわゆる「ランダのアルファベット Landa's "alphabet"」があったために、基底言語の音声形式よりも先にいくつかの字素の音価（の概略）を仮定することができた。

を表していると分かれば、表音字素<か>の音価は/ka/であり、/k/や/kat/等ではないはずだと言うときに前提している仮説である（もちろん、逆の場合、すなわち字素<か>の音価が/ka/であると分かったときにそれが表す語が/ka/であり、/k/や/kat/等ではないはずだと言う場合にも前提している）。つまり、この例で言えば、表される語の音素数とそれを表す字価の音素数とが一致しなければならないという仮説である。

また一つは**等質性の仮説 qualitative equivalence hypothesis**であり、これは例えば、字形「か」が語/ka/を表していると分かれば、字素<か>の音価は/ka/であり、/ta/や/ke/等ではないはずだと言うときに前提している仮説である。つまり、この例で言えば、表される語の音素の種類と、表す字価の音素の種類とが一致しなければならないという仮説である。

もう一つは**線状性の仮説 linearity hypothesis**であり、これは例えば、字形「か」が語/ka/を表していると分かれば、字素<か>の音価は/ka/であり、/ak/ではないはずだと言うときに前提している仮説である。つまり、この例で言えば、語の音素の順序と、字価の音素の順序とが一致しなければならないという仮説である。

ラス・シャムラ出土のウガリト楔形文字を解読するにあたって、ドイツのセム語学者バウアーHans Bauerは巧妙な手法を用いて一定の成功を取めたが、彼の手法は、上記のような仮説がなければ絶対に不可能であった¹²。

バウアーの採った手法に限らず、さまざまな解読方法がこれらの仮説を前提しているが、

¹² ウガリト文字は基本的に各語が分離記号で区切られるために、一語の長さが容易に判別できる。彼はその特徴から、これがセム系の言語を表す子音アルファベットであるとの前提を置くことができた。最初に彼は、テキストで接頭辞、接尾辞、一字語としてどの字素が用いられるかを調べた。次に、この言語が西セム語だとすると接頭辞、接尾辞、一字語としてどの音素が用いられるかを考えた。ここで、この3類すべてで使用される字素は、𐤂 (𐤃)と𐤄であり、どちらも使用頻度が高い。一方、3類すべてで使用される音素は、/w/、/k/、/m/であるが、このうち/k/は頻度が高くないので除外すると、次のような“doppelte Alternativen”が得られる：

𐤂は/w/か/m/のどちらかであり、𐤄は/w/か/m/のどちらかである。

同様にして、使用頻度の高い𐤁と𐤂は接頭辞・接尾辞としては用いられるが、一字語としては現れない。このような条件に合う西セム語の音素は/n/、/t/、/k/であるが、このうち/n/と/t/の頻度が高いので、また別の“doppelte Alternativen”が得られる：

𐤁は/n/または/t/、𐤂は/t/または/n/。

これらは書き換えれば、こうも言える：

/w/は𐤂または𐤄、/m/は𐤄または𐤂；/n/は𐤁または𐤂、/t/は𐤂または𐤁。

ここから後はテキスト中で語や形態素を同定して音価を推定していく、いわば正攻法を用いるわけであるが、すでに可能性は絞られているから、例えば一旦𐤄が/m/と推定されれば、自動的に𐤂は/w/に決まる。同様に、𐤂が/n/と推定されれば、𐤁が/t/と推定できるわけである（解読の経過の詳細はBauer (1930)の第2章を見られたい。なお、バウアーが/m/と推定した𐤄は後に/s/であることが判明した。また、バウアーが実質的に異字 allograph とみなした𐤂と𐤃は別々の字素であり、前者は/w/で問題ないが、後者は/k/であることが判明した）。

上記のような方法は、字素の単価性・異価性を仮定してはじめて可能になる。でなければ排反的選言とはならず、「選言肯定」に陥ってしまう。

本当にこれらの前提をそのまま受け入れてもよいのだろうか。

6.1.

考えてみればすぐに分かるように、これらの仮説が常に成り立つとは限らない。

まず(1)に関しては、これに反して字素の**多価性 polyvalence**を認めなければならない場合がある。ある根拠によって字素<A>が字価 *a* をもつと考えられ、また別の根拠によって同じ字素<A>が別の字価 *b* をもつと考えざるをえないとき、単価性の仮説はその字素について当てはまらないのである。

しかし、だからといってこの仮説をまったく仮定しなければ（すなわち字素がいくつの字価をもつてもよいならば）、解読は「何でもアリ」になってしまう。例えば、ある架空の未解読文字において、綴字「𑖞𑖟𑖡」が語/sakana/を、綴字「𑖟𑖡𑖢」が語/katana/を表していることが外部情報から分かったとしよう。このとき、例えば次のような字価が設定される。

解釈①：<𑖞> = /sa/, <𑖟> = /ka/, <𑖡> = /na/, <𑖢> = /ta/

解釈②：<𑖞> = /s/, <𑖟> = /ak/または/k/, <𑖡> = /ana/, <𑖢> = /at/

解釈③：<𑖞> = /s/, <𑖟> = /ak/または/k/, <𑖡> = /ana/または/na/, <𑖢> = /ata/

いずれも、この範囲では外部情報と内部情報とに整合的な説明を行っている。しかし、直観的に解釈③よりは解釈②が、解釈②よりは解釈①が高い説明能力をもつように思える。それは、上の解釈ほど、下の解釈よりも必要のない複雑性が少なく仮定されているからである。

以上の簡単な議論から、次のような前提が必要となる。

(4) 各字素の字価の数は必要最小限でなければならない。

この仮説は、**単純性原理 the principle of simplicity**——その他の条件が同じならば、より少ない仮定しか含まない説明がすぐれている——を各字素の字価数について当てはめたものである。ここでは説明が単純であるべきことを仮定しているのであって、文字体系そのものが単純であるべきと主張しているわけではない。ただし、多価性をもつ文字体系が何らかの方法でその曖昧性を回避しようとする傾向がある¹³ことは、字素が単価性を好む傾向があることの現れと考えるとよいと思われる。

6.2.

次に(2)に関しては、これに反して字素の**同価性 homovalence**を認めなければならない場

¹³ 多価性の強い文字体系では、音声補助 phonetic complement や限定符 determinative の用法が発達していることが多い。

合がある。ところで、どのような場合に同価性が認められるかという、ある同一の語（と文脈から判断できるもの）の綴字において字素の置換 substitution が見られる場合に、置換される字素どうしが同一の字価を（その一つとして）もつ可能性がある。ところが、置換されうるからといって、それらの字素が同一の字価をもつとは限らない。単に近似の字価をもっているだけの可能性もあるからである。つまり、字素の置換可能性 substitutability は同価性の必要条件だが十分条件ではない。

また、仮に字素が単価であれば、同価である単価の字素と分布が同じであることが予想されるが、字素が多価である場合、その字素がもつ字価の一つが別の字素の字価と同価であったとしても、別の字価があるために、分布は異なりうる。

したがって、(2)が仮定できる状況は限られ、次のように書き換えられなければならない。

- (5) **字素が単価であるという前提の下で、分布が異なる字素どうしの字価は、互いに異なっていないなければならない。**

6.3.

(3)に関しては、これらが仮説として意識されること自体がまずなかったように思われるが、これらが違反可能な場合があることを考えれば、あくまで仮説にすぎないことがわかる。例えば、冒頭で挙げた線文字 B の例では、𐌲𐌿𐌺𐌹 /Po-Ro/の音価¹⁴とそれが表す語/pōlos/がともに正しいとすれば、この場合等量性の仮説は成り立たない。

しかし、だからといってこれらの仮定をまったく置かなければ、解読は不可能である。例えば、綴字「𐌲𐌿𐌺𐌹」が語/sakana/を表すことが分かったときに、次のような解釈がなされたとする。

解釈①：<𐌲> = /sa/, <𐌿> = /ka/, <𐌺> = /na/

解釈②：<𐌲> = /sak/, <𐌿> = /ka/, <𐌺> = /na/

解釈③：<𐌲> = /sal/, <𐌿> = /ga/, <𐌺> = /an/

これだけの情報の範囲内では、直観的に解釈③よりは解釈②、解釈②よりは解釈①の方が説明能力があるように思えるが、そのような仮説間の評価は、次のような前提を置いているからこそ可能になるのである。

- (6) **綴字の各部分とその指示対象である語の各部分との不一致は必要最小限でなければならない。**

¹⁴ 線文字 B では基底言語の /pV_i/, /p^hV_i/, /bV_i/ が区別されず, /rV_i/ と /lV_i/ が区別されない (V_i は同一の母音)。それをここでは /PV_i/, /RV_i/ と表した。なお、これを字素の多価性とはみなさない。

この仮説は、単純性原理を字価と語との間の関係について当てはめたものである。

そして、この綴字と語との不一致を説明するのが綴字法の役割である。線文字 B における音価/Po-Ro/と音素列/pōlos/との乖離を説明するためには、例えば語末の子音を表記しないといった趣旨の規則が必要になってくる。もちろん、このような規則がアドホックな説明にとどまらないためには、複数の並行例を示す必要がある。

ところで綴字法は、どのような字価を設定するかによって影響されうる。4.で挙げた喩えで、 ξ, η, ζ の値（＝語）が分かっているとき、 x, y, z の値（＝字価）を決めれば p, q, r の値（＝綴字規則）も決まることがそれを示している（もちろん、その逆も成り立つ。つまり、 p, q, r の値を決めれば x, y, z の値も決まる）¹⁵。つまり、字価と綴字法はそれぞれ独立に考えることはできないのである（**字価と綴字法の相互依存性**）。

7.

以上見てきたところによれば、文字の解読——文字体系に関する最良の説明を選択する行為——は、単純性原理に基づく前提が置かれて初めて可能になるのである。もちろん、その説明は経験的データ（内部情報と外部情報）に照らして整合的であるという条件を満たしている必要がある。ただ、文字解読においては、入手可能なデータが限られているという不確実な状況下で常に仮説の選択を行っていることも忘れてはならない。たとえ「文字が解読された」と言える段階に達したとしても（明確にそのような段階があるわけではないけれども）、それはいつまでも不完全なデータに基づく仮説であって、真の答えそのものではないのである¹⁶。

¹⁵ 例えば古代ペルシア楔形文字では、 $/C_a/$ （子音＋短母音/a/）と $/C_i/$ （子音のみ）とが表記し分けられない。そこで、 $/xšāyaθiya/$ 「王」は $\langle x^a-s^a-a-y^a-θ^a-i-y^a \rangle$ と綴られる（ここでは字素を翻字で示す。なお、「王」は表語字素で表記されることもある）。ここでの問題に限定すれば、これらの字価には3通りの設定方法がある。

解釈①：字素 $\langle C^a \rangle$ に音価/C/および/Ca/を設定する。

解釈②：字素 $\langle C^a \rangle$ に音価/C/を設定する。

解釈③：字素 $\langle C^a \rangle$ に音価/Ca/を設定する。

解釈①は字素の多価性を仮定しているが、特別な綴字規則を必要としない。一方、解釈②、③は字素が単価であるが、語との間に量的な隔たりがあるため、何らかの綴字規則を必要とする。解釈②の場合は入力形 $/xšāyaθiya/$ の短母音/a/を削除する規則が、逆に解釈③の場合は入力形 $/xšāyaθiya/$ に対して、短母音/a/が後続しない位置では/a/を挿入する規則が必要となる。

¹⁶ 本稿では詳しく扱えなかったが、文字解読全般において、分布主義的方法がきわめて大きな役割を果たしている。これについては稿を改めて論じたい。

参考文献

- BARBER, E. J. W. (1974) *Archaeological Decipherment: A Handbook*. Princeton: Princeton University Press.
- BAUER, Hans (1930) *Entzifferung der Keilschrifttafeln von Ras Schamra*. Halle; Saale: Max Niemeyer Verlag.
- CHADWICK, John (1967) *The Decipherment of Linear B*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press. (First published in 1958.) [J. チャドウィック著, 大城功訳『線文字Bの解読』第2版, 東京: みすず書房, 1976年(初版1962年)]
- CHAMPOLLION le Jeune (1822) *Lettre à M. Dacier, ... relative à l'alphabet des hiéroglyphes phonétiques...* Paris: Firmin Didot père et fils.
- CLEATOR, P. E. (1959) *Lost Languages*. London: Robert Hale. [P. E. クリーター著, 大城功訳『失われた言語』東京: みすず書房, 1964年]
- COE, Michael D. (2012) *Breaking the Maya Code*, 3rd ed. New York: Thames & Hudson. (First published in 1992.) [マイケル・D. コウ著, 増田義郎監修, 武井摩利・徳江佐和子訳『マヤ文字解読』大阪: 創元社, 2003年]
- COTTRELL, Leonard (1971) *Reading the Past: The Story of Deciphering Ancient Languages*. London: The Macmillan Company.
- DOBLHOFFER, Ernst (1957) *Zeichen und Wunder: Die Entzifferung alter Schriften und Sprachen*. Wien: Paul Neff Verlag, 1957. [E・ドーブルホーフ著, 矢島文夫・佐藤牧夫訳『失われた文字の解読』I~III, 東京: 山本書店, 1963年; Mervyn SAVILL, transl. *Voices in Stone: The Decipherment of Ancient Scripts and Writings*. New York: Viking Press, 1961. ほかに各国語による翻訳あり. Reclam 出版社刊の1993年, 2008年版はウガリト文字・ビブロス文字, キプロス音節文字, 突厥文字の各章を割愛している.]
- FRIEDRICH, Johannes (1954) *Entzifferung Verschollener Schriften und Sprachen*. Berlin: Springer. [Frank GAYNOR, transl. *Extinct Languages*. New York: Philosophical Library, 1957.]
- GORDON, Cyrus H. (1982) *Forgotten Scripts: Their Ongoing Discovery and Decipherment*, revised and enlarged edition. New York: Basic Books. (First published in 1968.) [C. H. ゴードン著, 津村俊夫訳『古代文字の謎 —オリエント諸語の解読—』東京: 社会思想社, 1979年]
- GROTEFEND, Georgii Friderici (1802) "Praevia de cuneatis, quas vocant, inscriptionibus Persepolitanis legendis et explicandis relatio" in: W. MEYER (1893) "G. Fr. Grotefend's erste Nachricht von seiner Entzifferung der Keilschrift", *Nachrichten von der Königlischen Gesellschaft der Wissenschaften und der Georg-Augusts-Universität zu Göttingen* 14: 576-585.
- 高津春繁・関根正雄 (1964) 『古代文字の解読』東京: 岩波書店
- 河野六郎 (1977) 「文字の本質」『岩波講座 日本語 8 文字』東京: 岩波書店, pp. 1-22 [『河野六郎著作集 第3巻』東京: 平凡社, 1980年および『文字論』東京: 三省堂, 1994年に再録]

- MARTINET, André (1960) *Éléments de linguistique générale*. Paris: Armand Colin. [アンドレ・マルティネ著, 三宅徳嘉訳『一般言語学要理』東京: 岩波書店, 1972年]
「文字」『言語学大辞典 第6巻 術語編』亀井孝・河野六郎・千野栄一編, 東京: 三省堂, 1996年, pp. 1340-1344
- 西田龍雄 (1967)『西夏文字 その解読のプロセス』東京: 紀伊國屋書店
—— (1982)『アジアの未解読文字』東京: 大修館書店 [2002年『アジア古代文字の解読』と改題・加筆の上, 中公文庫 BIBLIO に収録]
—— (1984)『漢字文明圏の思考地図 —— 東アジア諸国は漢字をいかに採り入れ、変容させたか』京都: PHP 研究所
—— (1986)「言葉と文字 —— 文字学 ——」『言語学を学ぶ人のために』西田龍雄編, 京都: 世界思想社, pp. 220-254
- 愛宕松男 (1956)「契丹 Kitai 文字の解読について」『東北大学文学部研究年報』7: 350-329 [『愛宕松男 東洋史学論集 第三巻 キタイ・モンゴル史』に再録]
- POPE, Maurice (1999) *The Story of Decipherment: From Egyptian Hieroglyphs to Maya Script*, revised edition. London: Thames & Hudson. (First published in 1975.) [モーリス・ポープ著, 唐須教光訳『古代文字解読の物語』東京: 新潮社, 1982年 (1995年『古代文字の世界 エジプト象形文字から線文字 B まで』と改題の上, 講談社学術文庫に収録. ただし図版類を大幅に省く.)]
- ROBINSON, Andrew (2009) *Lost Languages: The Enigma of the World's Undeciphered Scripts*. London: Thames & Hudson. (First published by New York: McGraw-Hill, 2002.)
- 杉勇 (1968)『楔形文字入門』東京: 中央公論社 [2006年同題で講談社学術文庫に収録]
- VENTRIS, Michael (1952) “Work notes on Minoan language research: Note 20” in: Michael VENTRIS (1988) *Work Notes on Minoan Language Research and Other Unedited Papers*, edited by Anna SACCONI, Roma: Edizioni dell’atendo, pp. 327-331.
- 矢島文夫 (1980)『解読——古代文字への挑戦——』東京: 朝日新聞社 [1999年『解読 古代文字』と改題・補筆の上, ちくま学芸文庫に収録]
- YOUNG, Thomas (1819) “Egypt” in: *Supplement to the Fourth and Fifth Editions of the Encyclopædia Britannica*, vol. IV part I. London: Archibald Constable & Co. (John LEITCH, ed. (1855) *Miscellaneous Works of the Late Thomas Young, M.D., F.R.S., &c., and One of the Eight Foreign Associates of the National Institute of France*, vol. III. London: John Murray, pp. 86-197.)